

令和4年度 スポーツ庁委託事業

「障害者スポーツ推進プロジェクト
（コーディネーター配置事業）」

事業成果報告書

令和5年3月

（一般社団法人 青森県理学療法士会）

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、一社）青森県理学療法士会が実施した令和4年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（コーディネーター配置事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

目次

I . 事業概要	1
1 . 事業実施の趣旨	
2 . 事業の実施期間	
3 . 事業内容	
4 . 実施体制	
5 . 実施の流れ	
II . 実施結果	2
1 . 障害者スポーツへの参加	
2 . 理学療法士の参加	
3 . 参加者の声	
4 . コーディネーター・初回同行者の声	
III . 成果と課題	4
1 . 良かった点	
2 . 問題点	
3 . 今後の課題	

I. 事業概要

1. 事業実施の趣旨

青森県では青森県障害者福祉センターねむのき会館（以下ねむのき会館）が障害者スポーツの各種事業の中核を担っている。これらの事業では福祉分野の障害者施設や教育分野の特別支援学校などと連携し、対象者の窓口となっている。

しかしながら、医療分野における窓口は現状では構築されておらず、対象者が障害者スポーツに新たに参加する導線は未だ整備されていない。また、障害者スポーツへの参加者が少ない本県においては、我々理学療法士の障害者スポーツに関する認識も不十分である。特に本県では2026年に全国障害者スポーツ大会が開催予定となっており、障害者の方への啓蒙活動とともに幅広い分野からの出場機会を確保することが急務となっている。さらに、大会以降も継続的に障害者スポーツへの参加を推進するためのシステム構築が求められる。

本事業では、青森県における医療分野での障害者スポーツへの橋渡し役として青森県理学療法士会がその役割を担い、県内の障害者スポーツ人口の増加を目指すための紹介窓口システムの構築を目的とする。本事業を起点に、障害者ならびに理学療法士での認識を高め、より広く障害者スポーツを普及推進するための啓蒙ならびに発掘イベントの展開へつなげていくことを視野に入れている。

2. 事業の実施期間

令和4年6月15日から令和5年3月31日まで

3. 事業内容

①障害者スポーツ参加への橋渡し

医療機関（病院・クリニック）や介護福祉施設（老健・通所・入所）に勤務する理学療法士を介して、患者・利用者・家族へ社会参加の手段として障害者スポーツを紹介し、参加へつなげる。

②種目のコーディネートと参加調整

紹介フォーマットから申し込みがあった場合、コーディネーターが適応と考えられる障害者スポーツを患者・利用者・家族に紹介する。体験教室や各競技団体を紹介し、マッチングを行う。

③初回参加への同行

初回参加に同行を希望する方には、各地域担当の同行スタッフを立ち合いさせ、初回参加時の不安を軽減し円滑な参加につながるようサポートする。

4. 実施体制

①ねむのき会館担当者

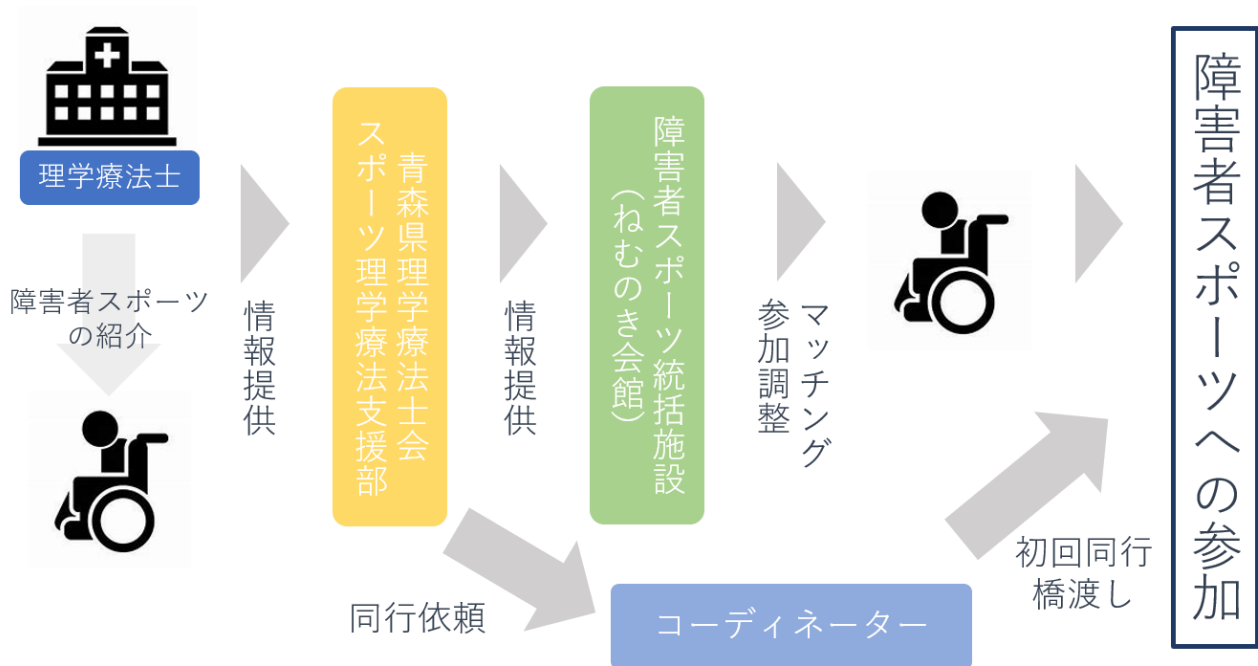
②青森県理学療法士会スポーツ理学療法支援部部員

③日本パラスポーツ協会公認の障害者スポーツ指導員もしくは、障害者スポーツトレーナーを持つ理学療法士

④各地域の障害者スポーツ指導員

⑤障害者スポーツに興味がある理学療法士

5. 実施の流れ



II. 実施の結果

1. 障害者スポーツへの参加

勤務理学療法士からの 情報提供数	10名（男性7名、女性3名） 年齢 52.7±16.4歳（17～71歳）
---------------------	---



本事業をきっかけに参加：7名

※うち、参加調整・初回同行：5名

達成率：35%（目標値：20名）

<参加者について>

原疾患	脊髄損傷3名、片麻痺4名、頸髄症1名 多発性硬化症1名、後縦靭帯骨化症1名
参加競技	ボッチャ、水泳、アーチェリー、陸上、 車いすカーリング、卓球

2. 理学療法士の参加

応募コーディネーター：23名

達成率：115%（目標値：20名）

3. 参加者の声

<参加した感想>

- ・非常に楽しかった。
- ・楽しかった。
- ・次回も参加したい。
- ・気が向けば参加したい。
- ・別のスポーツにも参加してみたい。
- ・次はない。

<コーディネーターの感想>

- ・コーディネーターには2,3回は同行してほしい。
- ・今後毎回同行してほしい。
- ・コーディネーターがいることで、とても楽しくできた、不安がなくなった、来てくれたから行けた。

4. コーディネーター・初回同行者の声

<参加した感想>

- ・なにより患者様が楽しんで取り組んでいること、それをみて家族が嬉しそうにしている場面がとてもよかった。その後も継続してもらえるための支援は重要だと感じた。今後ももちろん参加したい。

<困った点>

- ・初回同行後のコーディネーターの役割が不明確な部分がある。
- ・移動手段が課題。雪道や家族が高齢により運転者が存在しない場合もある。加えて体幹低緊張、褥瘡のある方などでの長時間移動は環境設定が必要。

<コーディネーターの必要性>

- ・患者様とコーチ・先生方との間で情報伝達する場合、本人が直接話をするのができなかつたり、緊張して話がしにくいところでの橋渡し役となれる。(専門的なことも聞かれる)
- ・身体機能を把握している者がいることで、競技団体への情報提供や今後の展望が変わってくると感じた。なにより、家族などのへのサポートも必要だと感じた。
- ・移乗全介助の対象者だとコーディネーターが2名必要だったが、スムーズに感じた。

Ⅲ. 成果と課題

1. 良かった点

- ◇7名の障害者スポーツへの参加につながった。
- ◇なにより、患者様・家族がスポーツを楽しみ喜んでいた。
- ◇事業を利用することで、参加するまでの流れはスムーズになった。
- ◇コーディネーターの同行により、初回参加時の精神的なハードルは軽減できた。
- ◇県内各地からコーディネーターの応募があった。
- ◇コーディネーター同士の繋がり、関心がある理学療法士のコミュニティが新たに形成された。

2. 問題点

- ◆事業案内に対してのレスポンスが少なかった。（県内の理学療法士約1000人に対して、問い合わせがあったのは10件。）
- ◆スポーツの場へ行くまでの移動手段がない。
- ◆郊外になると、近くに参加できるような団体が存在しない。
- ◆参加に至るまでのハードルはまだ高い。（対象者の受け入れ方、地理的条件）
- ◆COVID-19によるスポーツ教室の休止により選択肢が限られた。

3. 今後の課題

- ◎COVID-19の影響は少なからずあったが、ICTも利用した参加方法の工夫が必要。
- ◎勤務理学療法士からの依頼が少なく、認識を高めるためのアプローチが不十分。
 - 理学療法士が自ら障害者スポーツに触れる機会や、ともに参加する機会を設ける。
 - 病院や施設へ直接訪問し障害者スポーツ教室等を開催する。
- ◎移動手段が課題となることも多く、ICTや行政のサービスの利用など工夫が必要。
- ◎競技団体の数が少なく、地域偏在もあることから統括施設と連携しながら、各地域での人材育成が必要。
- ◎他職種にも協力を仰ぎながら、地域での障害者スポーツを通じた社会参加の認識を高める。